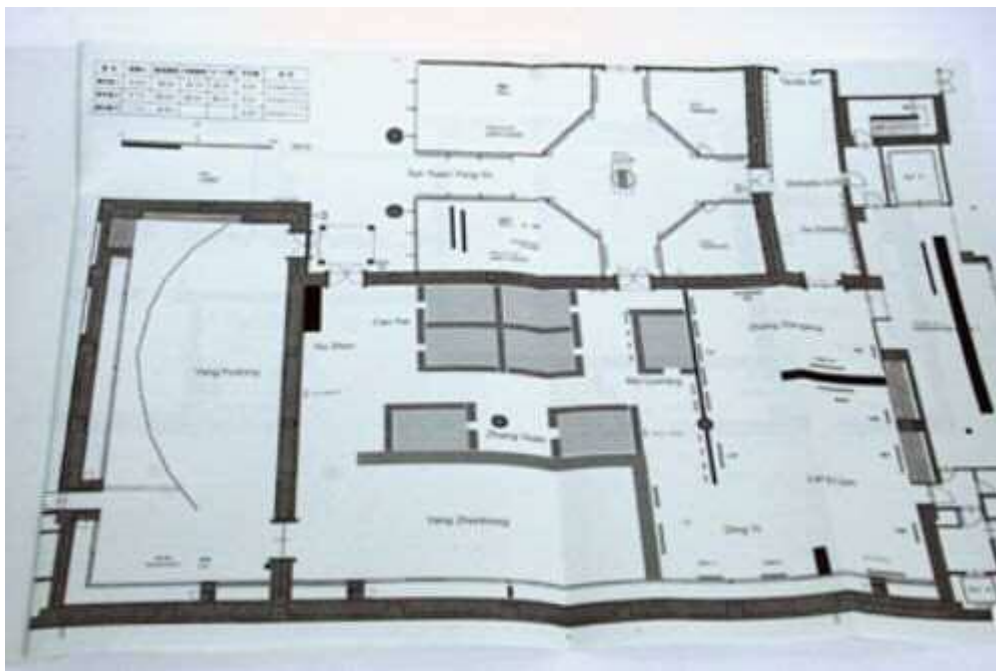


さてさて、中国現代アートの決定版「アヴァンギャルド・チャイナ」展ですが、東京での展覧会も無事に終わり、次は大阪の国立国際美術館での開催となります。大阪が終わると、来年の4月からいよいよ愛知県美術館での開催です。

ところで、どうして愛知県美術館の学芸員が他の美術館での開催にこんなにも興味津々なのかお分かりですか。それは、いくつかの美術館などが協力しあって一つの展覧会を作っているからです。もちろん、一館だけで展覧会を企画することもあります。複数の美術館が集まって協力すると、そのぶんアイデアや人材、経験、お金も集まります。一緒に展覧会を作り上げた美術館同士、お互いの状況は気になるものです。



↑ 現段階での会場展示プラン。どこか入口になるのでしょうか・・・！？

さてさて、そんな「アヴァンギャルド・チャイナ」展なのですが、愛知県美術館では、今、展示プランの計画に本格的に取り掛かったところです。楊福東（ヤン・フートン）、曹斐（ツァオ・フェイ）などの映像作品の場合、機材の設置や配線も含めて会場プランを作らなければなりません。また、車椅子のお爺さん達（孫原・彭禹の《老人ホーム》）を、どのように安全な場所で動かすかも重要な問題です。

狭い場所だと、鑑賞者や柱にぶつかってしまいそうになるからです。

ともあれ、この展覧会は作品数が多いうえ、絵画や彫刻という枠に収まりきれないいろいろなものがあるので、ずいぶんとはみ出し気味（！？）の展示になりそうな予感がします。

(F.N)

愛知県美術館友の会では、会員向けの講演会や講座も開催しています。その内容は当館の展覧会やコレクション関連に限らず、「ルネッサンス」「ヴァトー、シャルダン」「ガンダーラとパーミヤン」「仏像の光背」「浮世絵」「人間国宝の陶芸」など、会員の希望による幅広いテーマが取り上げられています。

去る7月24日（土）には、「現代の表現—社会の中での試み」と題した講座が催されました。講師は豊田市美術館チーフキュレーターで美術批評家の天野一夫さん。



▲大きな部屋での講演会とはまた違った和やかさと熱気が。

天野さんのお話は、現代美術を（自分なりに）読み解くことを愉しもう、あいちトリエンナーレでいつもの美術館・いつもの街が異なったものになることを現場で感じよう！ というもの。

現代美術と社会の関係の例として、クリスト（大きな建物や自然の景観などを布で包む作品で有名）の制作記録が紹介されました。作品の壮大さをあらためて感じるとともに、地元住民たちの賛否両論熱い語り口に、ご聴講の皆さんから笑いがこぼれました。



▲万里の長城のような、クリストの布フェンス。

友の会へのご入会は、トリエンナーレ開催中も美術館入口で受け付けています。

( T . M . )

ところでこの「さらし」、使えば当然汚れます。汚れば洗って使えばいい、というのがまた「さらし」のいい所ではあるのですが、これがまたなかなか厄介なのです。

「さらしの話 1」で紹介しました通り、「さらし」は普通、35cm 弱ぐらいの幅で売られています。美術館では用途に合わせて、これをこの幅で使ったり、半分や3分の1幅に裂いたり、時にはもっともっと細く裂いて使う事もあります。

で、これをいきなり洗濯機に入れて洗うとどういうことになるでしょう？洗い終わって、洗濯機から出てくる頃には、こんがらがって、どこから手をつけていいのかわからない代物と化してしまいます。

それで私どもは、このように緩く巻いて、あるいは蛇腹に折って、中央をきつく輪ゴムで縛ってから洗濯します。

↓洗濯前



当館ではこの作業を、現在、友の会の中の「所蔵品管理サポート部会」のみなさんがして下さっています。

↓さらしまき



↓物干



洗い上がったものも、この通り、皺をのばしてきっちり巻き込んで現場に提供して下さいます。

↓洗濯後



さらしは「さらしの話 1」でもお話ししましたとおり、紐の様に一部分に圧力を掛けるのではなく、できるだけ分散させるために使うのですから、このような事前の手間ひまが、実は作品保護の為に重要な意味を持っているのです。

また棚のフランケンシュタインも、シワシワの棒状のさらしと、幅いっぱい、ピンと張ったさらしとでは、どちらがより効果的であるかといえば明々白々です。さらしを巻くのは学芸員ですが、その手間の効果が60%なのか、100%なのか、このサポート部会のみなさんの、美術館に対する惜しみない労力によって大いに変わってくるということです。

(N. N.)

ニューヨークのアクアベラ画廊での「ロバート&エセル・スカル——コレクションのポートレート」展（2010年4月15日の当ブログ「スカル夫妻のニューヨーク出張」参照）に貸し出していたジョージ・シーガルの《ロバート&エセル・スカルの肖像》が、展覧会を終えて愛知県美術館に無事に帰ってきました。



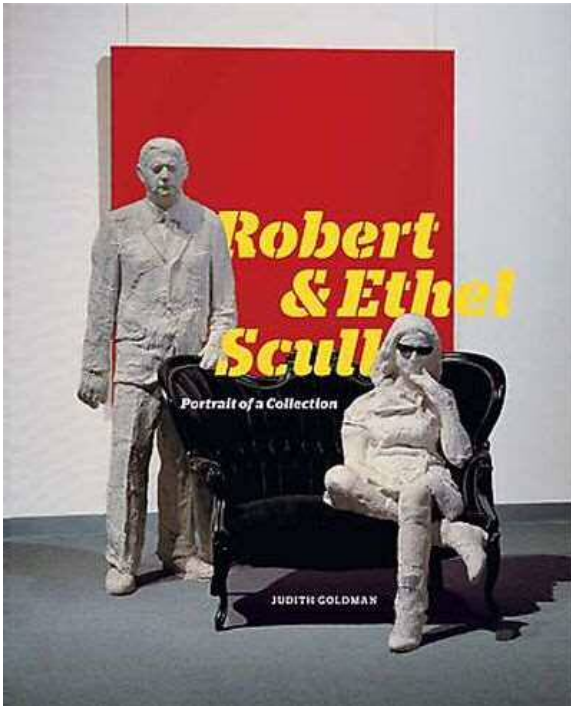
▲ ジョージ・シーガル 《ロバート&エセル・スカルの肖像》 1965年 油彩・画布、石膏、木製布張り椅子 181.0 x 143.5 x 143.0 cm 愛知県美術館（アクアベラ画廊「ロバート&エセル・スカル」展での展示）





#### ▲ 日本への輸送のため、再び梱包されるエセル像

ニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、ホイットニー美術館、フィラデルフィア美術館、デトロイト美術館など、名立たる美術館から作品を集めたこの展覧会はとても盛況だったようで、『ニューヨーク・タイムズ』、『アートニュース』、『ヴォーグ』など、メディアにもたくさん取り上げられました。そんなニューヨークのスカル展で、当館のシーガル作品は広報面でも大活躍しました。



#### ▲ スカル展図録

まず、以前にもお知らせしましたが、展覧会図録の表紙になりました。また、アクアベラ画廊のほか、メトロポリタン美術館、グッゲンハイム美術館、ホイットニー美術館なども集まるマンハッタンのアートなエリアに設置された数十本のバナー広告にも使われました。



▲ メトロポリタン美術館のすぐそば、五番街と79丁目の交差点（画像提供：アクアベラ画廊）



▲ ホイットニー美術館のあるマジソン街（画像提供：アクアベラ画廊）

その他、同様のポスターなども作成されました。今回のシーガル作品貸出しで、Aichi Prefectural Museum

of Art も、ニューヨークで少しは有名になったことと思います。スカル夫妻、お疲れ様でした！ (T0)

愛知県美術館 10 階の「ラウンジ」と呼ばれる八角形の空間には、開館以来レームブルックのブロンズ彫刻《立ち上がる青年》がたいてい展示されています。この作品も「あいちトリエンナーレ 2010」のために片付けました。《立ち上がる青年》は人力で持ち上げられるほど軽くないので、作業もたいへんです。この彫刻は 3 次元の揺れにも対応する専用の免震台に乗っているので、まずは免震台が動かないように固定することから始め、いくつかの作業工程を経て、収蔵庫内の予め確保しておいたスペースに収納しました。重い作品の移動は見ているだけでも疲れるものです。

(H. F.)



←免震台を固定しています。



←作品を移動します。



←トリエンナーレが終わるまで収蔵庫でしばらくお休み  
です。



←残った免震台を片付ければ作業終了



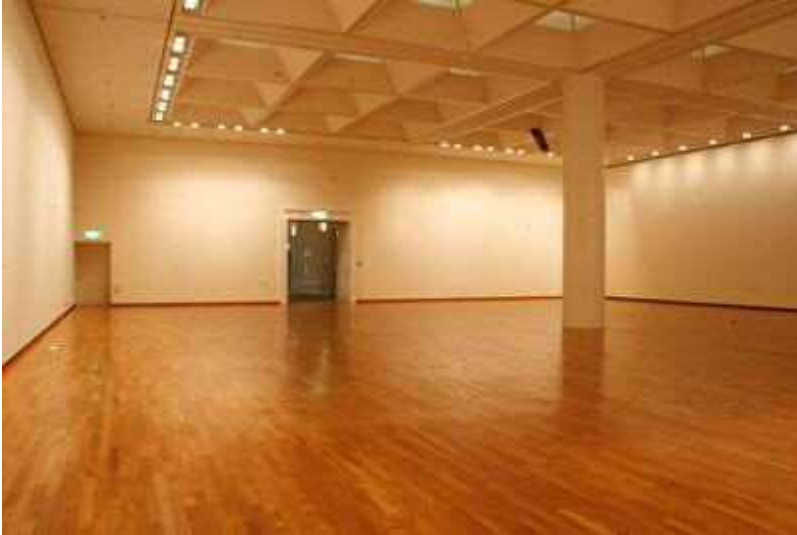
愛知芸術文化センター10階の愛知県美術館企画展示室、所蔵品展示室での展示は7月11日で一旦終了しました。そして8月に始まるあいちトリエンナーレ2010の開催に向けて準備が始まっています。

その最初として壁のお化粧直しを行いました。これまでは壁から作品が全く消えることはなかった所蔵作品の展示室ですが、今回は開館以来初めてすべての展示室から一旦作品を撤去して、汚れが目立ってきた壁の塗り直しを行いました。



限られた時間内に作業を行うために、多数の作業員が従事して作業は行われました。さすがに広い壁も見見るうちに塗られていくのでした。とはいえ高い壁は6メートル近くもあり、また可動壁も含めて全て塗り替えるため大変な作業で5日間を要しました。





展示室によっては普段可動壁で仕切られ、作品が壁に架かった状態しかご覧になれないのですが、きれいにお化粧直しが終わった後は、この写真のように可動壁が全て収納され、広々とした空間が広がっています。この展示室 5 では動物彫刻の三沢厚彦さんとインスタレーション豊島秀樹さんのコラボレーションの展示が予定されています。この大きな部屋を二人だけで使われます。どんな展開になるのか乞うご期待！（ST）

所蔵作品展の展示室には作品こそ変わるものの常に100数十点の作品が出ていますが、展示室が「あいちトリエンナーレ2010」で使われるため、作品を収蔵庫に片付けなくてはなりません。1992年の芸術文化センターの開館以来、所蔵作品展の展示室の作品をすべて収蔵庫にしまったことは一度もなかったように思います。その準備として、収蔵庫の整理をしました。

基本的には、ラックと呼ばれる格子状のスクリーンに掛かっている絵を移動し、戻ってくる絵を掛けるスペースを空けておいてやるという作業です。



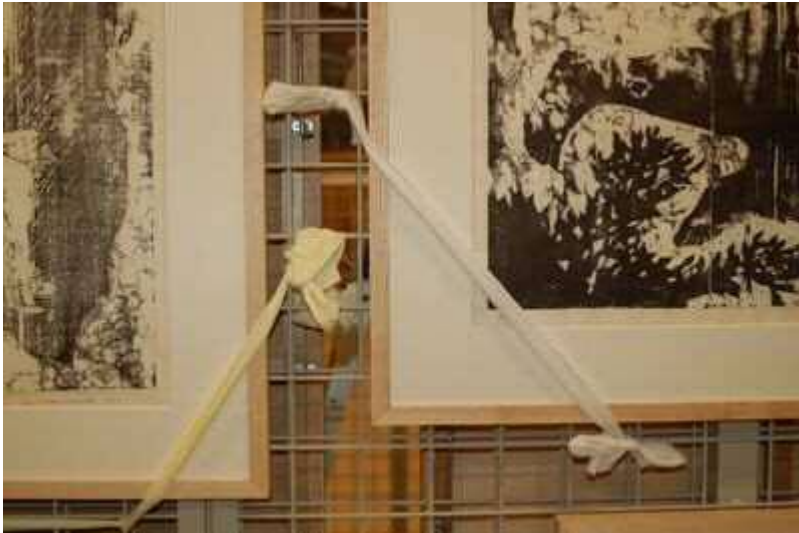
↑左の作品を左いっぱいにかけて



↑ 右の作品をその上に掛けると、右側に大きなスペースが



↑ 整理が終わったら、地震対策としてさらしで作品を固定



↑拡大です

なんとか準備は整ったので、あとは戻ってくるのを待つばかりです。はたしてすべての作品がうまく納まるでしょうか。

(H.F.)

こちらのライオン（本名は《ライオン(Animal 2008-01)》、三沢厚彦の作品です）は、去年の春にアニマルズ inAAC で愛知芸術文化センターに初めて来て以来、愛知県の議事堂へも出張展示に行ったりと大忙しでした。

そしてこのたび、またもや遠くへお出かけする事になりました。行き先はなんと九州、鹿児島県。霧島アートの森で開かれる「ANIMALS in KIRISHIMA 三沢厚彦展」への出展が決まったからです。



↑「ぼく、鹿児島の展示会に行くんだよ」と嬉しそうなライオン。





↑ライオンを無事に鹿児島までお送りするため、様々な機材が用意されます。



↑さあ、お出かけに向けてお着替えしますよ。（梱包、とも言います）

鹿児島へ向けて輸送の準備をしていると、それを見ていた周りの方々から「ライオン、行っちゃうんだ、寂しくなるなあ」という声が聞かれました。けれども、鹿児島に行けば会えますし、8月後半より

始まるあいちトリエンナーレではたくさんの動物達がよりパワーアップして当館に登場する予定です。

どうぞ会いに来てくださいね。 (F. N)

現在、あいちトリエンナーレ開催中の愛知県美術館。トリエンナーレの展示のために、所蔵作品は収蔵庫に仕舞われていますが、それでも「今、所蔵作品はどこで見られるの」というありがたいお問い合わせをいくつかいただいております。そこで今回は、トリエンナーレ期間中も見られる愛知県美術館の所蔵作品についてご紹介します。

まず、田原市博物館のサテライト展示「愛知県美術館 所蔵作品による川瀬巴水展」(9月20日まで)がおすすりめです。巴水は日本の津々浦々を訪ね歩き、その光景を美しい版画で表現した版画家です。大正から昭和にかけて活躍した巴水は「昭和の広重」とも呼ばれています。秋の田原で日本の名所巡り、いかがでしょうか。



また、10月23日から12月19日にかけて三重県立美術館で「愛知・岐阜・三重三県立美術館協同企画展 ひろがるアート」が開催されます。三重県立美術館、岐阜県美術館、そして愛知県美術館の所蔵作品で構成される展覧会です。三重県立美術館の学芸員さんの手腕が発揮されるこの展覧会、当館で行う



所蔵作品展とはひと味、ふた味も違うかたちで愛知県美術館の所蔵作品が展示されます。大型の現代美術作品が数多く展示される予定ですので、愛知県美術館としてもどのようなになるのかドキドキです。





↑ニーヴェルソンの巨大なオブジェも解体され、三重への輸送を待つばかりです。

もちろん、これら以外にも全国各地の美術展に愛知県美術館の所蔵作品が出展されています。しかし、やっぱり気になるのは当館の代表作品であるクリムトやピカソの行方ではないでしょうか。実はクリムト《人生は戦いなり（黄金の騎士）》もピカソ《青い肩掛けの女》も、トリエンナーレ期間中は海外に貸し出される予定です。これについては、次回のブログでお伝えします。

（F. N）